

## 銀鱗を書いて

横 光 晃

若い時に敗戦を迎えた人なら、誰でも経験したのではないのでしょうか。——

今まで自分たちの上に君臨していた絶対なるものが、ガラガラと音を立てて崩折れたショックは大変なものでありました。

以来、わたしは、極めて実証精神が旺盛になり、——道を行く人がみんなスリかドロボーに見えるおノボりさんのように——、一寸でも権威と呼ばれるものには猜疑の眼をもつて接する習癖を身につけてしまいました。

仮令相手が、20世紀の旗頭である科学であつても例外ではありません。

人工孵化事業という地味な名の存在についても、

「どうも、その道の人のお道楽みたいな」気がして居つたのが、偽らざる告白であります。

「もし、人工孵化がそんなにいいことなら鮭や鱒に限らず——ないないと言われているニシンだつて、それでやつたらどんなものだろう。

アキアジ一本槍じゃあ、石狩あたりの観光宣伝に一役買っている程度じゃないのではないか。」

多くの人と同じような、不明偏見に陥入つて居たのであります。

こんな言語道断な私のところへ、鮭鱒の人工孵化事業を素材にしたドラマを書くべしというお達しがあつたのですから私の恐慌ぶりは目をおおうばかりのもの

があつたのではなからうかと思われま

す。凡そ、ドラマを作る仕事、作劇という操作において、もつとも警戒すべきは、——知性と教養であります。

俗に言う、教養が邪魔をして云々……が、その儘ドラマを書くにあたつて当てはまるのです。

つまり、知性や教養は、ドラマをある安定した形に導くことはできるが、——一番カンジンな情熱を奪い去つてしまうということです。

さよう、ドラマとは思想をのべる場ではなく、思想を情熱的に行動するところだからであります。

残念なことには、こと人工孵化事業については、わたしは情熱の持ち合せがありません。

いきおい、あとからツメコム知識を土台にして書きあげて行かねばならなくなつたのであります。

悪いコースであります。

そこで、——追いつめられた私は窮余の一策として——事業そのものから情熱を汲みとれないのだから、事業をめぐつての事件に共感を覚えるものを探そうとこう考えたのでした。

こういう態度でいたものですから、さていよいよ、孵化場の秋庭氏が次から次へと、それは愕ろくばかり豊富な資料を提示して戴いても、——なかなかカチンと来るがありません。

青砥武平次のはなし、川口祝三のはなし、数々の先人の苦心談、——何れも「なるほどえらいものだ」と思うのですが、いわばよくある話で、二番煎じの感を免れない。情熱の足がかりが見つからないのです。

しかし、話がたまたま戦後に移つて、——人工孵化事業にも、ひところ苦しい時期があつた。GHQの影響で廃止の危険さへあつた。という事を聞いてようやく安堵したのであります。

当時GHQと言えば、オール・マイテイでありました。放送界でも随分と好きなようにふりまわされたものです。それを今日まで持続させ発展させて来たに就ては、これはその衝にあつた人たちに、余程性根があつたに違いない。——性根ということなら、どんな世界にでも通用する切符です。「これなら何とか書けるかもしれない、やつてみようか」ということになつたのであります。

だが奇妙なことに、やがてドラマを書き始めると、私のうちに次第にこの人工孵化事業に対する愛着が湧きはじめました。

人工孵化事業の成果が、必らずしも、計算どおりはつきり出て来るとは限らない点にです。

それは古来、詩を作るより田を作れと言われつづけて来たわたし達の仕事に、何と共通していることでしょう。

すなわち、未来を夢みる仕事、現実を前進させる仕事であります。

放してやつた稚魚が、4年後に帰つて来るのを期待する仕事。しかもその4年間については、図りしれない未知の深淵が横たわつているのに……

勇気と自信と、未来を夢みる人にだけできる仕事にちがいないのです。

かくして、ドラマの主題もようやくとらまえることが叶えられたのでありました。

ドラマを書くに当つて、秋庭氏のご案内で、実際の孵化場を二・三見せて戴きました。

孵化の仕事を経年にわたつてなきていらつしやつた人たちにもお逢いしました。

訥々と語られるその人たちのお話を聞いているうちに、私はふいにまた、ドラマの主題に不安がやつて来るのを感じました。

勤続30年になられるという方が、「魚が戻つて来たのを見ても、格別、感激というほどのことはありませんね。

遊びに行つた子供が帰つて来たようなもので、やあ帰つたか、といつたところですよ。」

そうおつしやられる言葉には、——私が思つていた未来を夢みる——などという聊かロマンチックな気負いは少しもなかつたのです。

その方の落ち着いた眼差しの中に、私は、ふと古い中国の伝説を思い出したのであります。

——ある魔法を信じない人のところへ魔法つかいがやつて来たので、その人はお茶だけ出して、お茶をにごすと裏庭から散歩に出かけたというのです。

すると、すてきな美人が通りかかつた。道を訪ねられた。案内しましょうということになつて行くうちに——心通じるところがあつて、彼女の訪ねた家へ上りこんでしまつた。夫婦になつて子供が

できて、ある日のこと子供が海に落ちて、助けに行つた母もろとも死んでしまつた。

世の中に無情を感じてひとりとはとぼとぼ歩くうちに、ふと気がつくともとの自分の家であつた。家出したときのことを思つてポカンとしていると、——

中から魔法つかいの声が聞えて来た。

「いや、結構なお茶でございますな。」

——ほんのひとつとぎの間に、その人は魔法の力で何年もの生活をした訳であります。未来はほんのひとつとぎの現実の中にあつたのです。

年の長い間、孵化事業をして来られた方には、未来は夢みるものではなく、現実でありました。

私の考えたような、甘つちよろい気負いなど、さらに必要はなかつたのです。

未来を信ずるということは、未来に幻影を描くことではなく、未来のために実行することだ。

あさはかにも、その時はじめて、そのことに気がついたのです。

気がつけば難しいことではありません。

人工孵化事業とは、特別変つたもので

はなく、百姓さんが秋の豊作を期待して畑に種をまくように、——海に種をまくことであります。

それは人間だけの為しうる仕事でありその意味で偉大であり、その意味で平凡な仕事なのではないでしょうか。

連続ドラマ「銀鱗」私なりに一生けんめい書いたドラマですが、——

どうもバツトしなかつたのは、斯の如く作者の態度がフラフラしたためであり、つまり素材負けという奴で、——

資料などで、厚いお力添えを下さつた方々に申し訳なく思つております。

しかしながら、失敗は何とかの礎石とか、——これからの人工孵化事業は今までのように海に種をまきつばなしというだけじゃなく、管理の方向にも手をのばして行かねばならないのではないか——

などと、怖るべき見識を述べる昨今でありますから、的外れだつた「銀鱗」も近い将来、違う形で傑作となつて現われるものと考えられます。——大洋に迷い出た稚魚が一人前の親魚となつて帰つて来るように——

#### 記念論文「鮭鱒増殖事業の方向」

賞 金 入選1席1万円、2席6千円、3席3千円、各1篇宛。

応募者全員に粗品呈上。

選 者 水産庁長官西村建次郎氏、北海道大学水産学部長田村正氏、北海道内水面漁場管理委員会会長半田芳男氏。

(応募規定)

1. 首題は必ずしも北海道の場合に限らず、広く国際的な視野からの論述も可。
2. 論文の長端、応募篇数は自由。
3. 応募には原稿用紙を用い、略歴住所を併記のこと。
4. 発表は「魚と卵」誌によつて行なうほか、他の公刊物による場合もある。
5. 締切 昭和35年3月31日。当日消印有効。
6. 送付先 札幌市外中の島孵化場内記念論文係。